キズナエピソード

槍水りり　6話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//とびお自室

「よっ、とびおー。元気にしてるー？

　今日泊まりに行くけど、いいよね？」

週末になって、りりから連絡が来た。

あの日、母親と話し合いに行ってから連絡がなかったが、

泊まりに来るということは、

まだ喧嘩しているということだろうか。

//次ページ

「おう、いいぞー。飯作って待っててやる」

「わー！　とびおって料理うまいよね！　楽しみー」

「なんか食べたいのあるか？　リクエスト受け付けるぞ～」

「とびおが作るものなら、なんでも良いよ」

「そういうのが、一番困る」

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//とびおの家・玄関

［りり］

「どもどもー。お邪魔するよー」

［とびお］

「はいどうぞー……って、うぉ！

なんだ、その大きなバッグは！」

［りり］

「着替えだよ、着替え。

今回はちゃんと持ってきたよー。

いつまでもとびおの借りるわけにもいかないしね」

［とびお］

「いや、それはそれとしても、量多すぎだろ！

何泊する気だ!?」

［りり］

「何言ってんの～。女の子は荷物が多いもんなの。

それじゃ、あがらせてもらうよー」

//とびおの家・玄関

［とびお］

それからはいつもどおりだった。

ご飯を食べて、他愛ないお喋りをして、

ダラダラと時を過ごしていく。

［とびお］

「……ところで、まだ喧嘩してるのか」

［とびお］

落ち着いた頃合いを見て、俺は質問を投げかけてみた。

気分を悪くするかと思ったがそれは杞憂だったようで、

りりはあっけらかんと答えてくれた。

［りり］

「ううん。ちゃんと話し合って、仲直りしたよ」

［とびお］

「へ？　じゃあ、なんで泊まりに来たんだ？」

［りり］

「なんだよー。

別に普通に泊まりに来たっていいじゃんよー」

「とびお］

「いや、まぁそうだけどさ……。

でも、仲直りできたんだ。よかったな」

［りり］

「うん、ありがと」

［りり］

「でも、アタシが泊まりに来たのは

ちゃんと理由があるよ。

とびおに話したいことがあるの」

［とびお］

「話したいこと？　それなら電話でも――」

［りり］

「ゆっくり話したいんだよ！

夜通しかけて、さ。いいでしょ？」

［とびお］

「おっけー。じゃあその前にお風呂入ってこい」

［りり］

「はーい」

//暗転

//とびお自室

［とびお］

そうして互いに心も体もさっぱりした頃。

俺とりりはベッドに腰掛けながら話し合う。

りりはまず、母親との話し合いの内容を教えてくれた。

［りり］

「――というわけで、アタシの両親はきちんと

離婚することになってたんだって。

アタシ、バカのくせに色々考えすぎてたみたい」

［とびお］

「ははっ、自分で言うか」

［とびお］

「でもよかったよ。今のりりがりりらしい。

あの時のお前、全然お前らしくなかったもん。

誰だこいつ、って思ったわ」

［りり］

「……うん、あのときはごめんね」

［とびお］

「いや、そんな真面目に謝らなくても――」

［りり］

「アタシあのとき、ちょっと自暴自棄になってた」

［とびお］

そこでようやく、

りりが言っている『あのとき』の意味を理解した。

［とびお］

あの大雨の日。

『……したい？』

お風呂上がりにそう聞いてきたことだ。

［とびお］

「ははっ、気にするな。

俺もおかしいなって思ったんだから」

［とびお］

「でも、ああいう風に誘うのはやめてくれ。

俺だって男なんだからさ、

からかうのはほどほどにしてくれよ」

［とびお］

冗談めかして話題を流そうしたが、

りりは俺を見つめて少し距離を詰めてくる。

［りり］

「ふーん、からかってなければいいんだ？」

［とびお］

「おい、りり。

だから、そういうのが――」

［とびお］

瞬間、オレの唇に柔らかい何かが触れた。

それがりりの唇だと気づくまで、時間がかかった。

=========================スチルカットシーンB開始=========================

［とびお］

「お、おま、りり、おま……」

［りり］

「へへ～。ごめん。今度は本気なんだ」

［とびお］

「本気？

男はみんなアホじゃなかったのかよ？」

［りり］

「んー、とびおは特別。

……光栄っしょ？　初恋だよ？」

［とびお］

そう言って、りりは恥ずかしそうに笑った。

それだけで、俺の心は幸せで満たされていった。

=========================スチルカットシーンB終了=========================

//◆18禁版はRシーンへ

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//白い部屋

そこで意識が覚醒した。

「……あんな可能性もあったのかもしれない」

俺はひとりごちて、白い空間を眺める。

大きなスクリーンに、りりとの思い出を幻視する。

//次ページ

みんなを楽しく盛り上げるりり。

友人を気遣い、手助けをするりり。

そのくせ、自分のことは一人で抱えて悩むりり。

そして、頼れる人を見つけてはにかんで見せるりり。

……そのどれもが、愛しかった。

//次ページ

自然と胸の奥から気持ちが沸き起こってくる。

りりを守りたい。

俺は心にそう誓った。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//6話END